

耐性菌の出現と、これをどう考えるか

今までの耐性菌は免疫が劣っている人が感染を受けるタイプでしたが、最近、[抗菌剤を分解する酵素遺伝子を持つスーパー耐性菌](#)がにわかにかローズアップされています。専門家によっては免疫力に関わらず問題を起こすので、今までの耐性菌とは違うと警鐘を鳴らす人もいます。病院やインドで確認されたものが大げさに報道され、相次いで死亡まで至っているからです。しかし基本的には免疫の低下が根底にはあるようです。

抗生物質を低用量で持続的に使用する畜産分野(添加物として飼料添加)が耐性菌の発現の元凶であるとか何とかやり玉に挙げられた経緯がありました。その為、EUでは添加物が禁止になったわけですが、それでも依然としてスーパーの畜肉から耐性株が検出されています。本当は一体どうなっているのでしょうか。こうした耐性菌は何処で発生し、どこから来るのだろうかという素朴な疑問が常に残ります。

専門家によれば、耐性菌はいつでもどこでも分離されるものであり、さらに国が認める飼料添加物(発育促進効果)によって発現しているとは考えられないので、廃止する方向にはいかないだろうということです。

それでも生産農場が原因だと躍起になっている人たちもいて、農場などを対象にした本格的な調査(下表)もまとめられています。

MRSA 耐性菌(メテシリン耐性菌)がカナダの農場で高率確認

メテシリン(アンピシリンの仲間の新世代抗菌剤)に耐性を持つブドウ球菌がかなり高率に養豚場にいるという報告が初めて北アメリカでまとめられました。

(*Veterinary Microbiology study* :Khanna et al. 2007)

カナダ・オンタリオ州の 20 農場で 285 頭の調査です。その結果、45%を占める 9 農場で MRSA が確認され、おおよそ 25%の豚が陽性でした。菌を詳しく調べてみると、人の MRSA 原因菌として位置付けられているものも含まれていたようです。

MRSA 耐性問題を検討している医者、農業者、環境スペシャリストらの調査チームは、この結果に基づき、議会を通じてアメリカ食品医薬品局(FDA)に、人の抗生物質を農場で使用することが原因かどうかの調査を求める要請を出しています。

(pork magazine)

最近はこのスーパー耐性菌に効果的な抗菌剤として、大変ポピュラーで医療ではすでに使用されていないコリスチンが含まれていることも報告されています。これを医療現場で使用するよう働き掛けている医療関係者もあります。そんな場合こうした旧来の抗菌剤が農場現場で使えなくなってしまうのが心配です。

私たちは、EU発動以前から添加物を一切使用しないで、すべて獣医師の指示で抗菌剤を使用してきましたが、耐性菌の発現阻止に少なからず貢献していると自負しております。消費者サイドへの安全のメッセージとして受けられるのはまだまだ時間がかかるのでしょうか。

2011 年 1 月 グローバルピッグファーム(株)